

家庭教育支援チーム・サポーター養成講座② 実施レポート

日時：令和元年9月13日（金）10時～15時

会場：秋田県生涯学習センター 3階 講堂

参加者：52名（うち市町村等から42名）

今回は「子どもや親と向き合い、上手に話を聞くスキルを身につけよう」というテーマで講座を開催しました。常磐大学人間科学部心理学科教授の秋山 邦久 氏を講師に迎え、コミュニケーションを図る上で必要な「文脈合わせ」等について理解を深め、上手に話を聞くスキルを体験的に学びました。



【午前の部 講話・演習①】

「みなさん、たこあげました？」。正月の話をしていたところで、秋山先生のこの質問。参加者は皆「凧」を連想しました。ところが先生が聞いたかったのは「蛸を揚げたかどうか」。話の展開や風習の違いにより双方の想像と反応にズレが生じたケースです。コミュニケーションは、内容と文脈（背景や関係性）つまり「いつ、どこで、誰と、誰が、何を、どのように」伝え合っているかが重要で、その文脈が合っていないと「ことば」が届かないことを、ユーモアを交えながらレクチャーしていただきました。特に、発達特性のある子どもは文脈をうまく読めないことがあり、「空気を読めない」と周りから判断され

がちです。個別・具体的支援をする上で、「誤学習」と「未学習」の違いを踏まえながら、どこからできていて、どこまでできていないかを知ること、目の前の人の文脈に合わせて支援することが重要であることを強調されました。

次に、子育ての問題について取り上げました。子育て支援は社会的自立を目標としますが、一部の親は子どもが側にいないと不安で仕方ないというケースも見受けられます。親子共倒れになるケースも少なくないことから、子どもの心の発達を理解し、文脈を合わせて支援するための3つのポイントを学びました。

＜①監視から観察へ ②感心しながら、関心を持つこと ③逆接を使わず、順接で話す＞

監視とは、自分の物差しで他人の価値観を図ること。観察とは、他人の価値観を受け入れることです。秋山先生は、毎日自分のいいところの一つでいいから見つけ、口に出して言う訓練が効果的だと紹介し、その後、視線や顎の位置を変えてペアで上手に話を聞く練習をしました。いちばんの親支援は、支援者がモデルを見せること。参加者は、どのようにして「ことば」をかけたらいいか、行動を変えてもらえるかなどを体験し実感して、そのスキルの有用性を学ぶことができました。また先生は、適切な「ほめ方」・適切な「注意の仕方」をできる人こそが愛情ある人であるとし、人を援助するためにはこれらの技術・スキルをもつ必要があることを力説されました。

【午後の部 講話・演習②】

講義後半は「報酬」と「居場所」をキーワードにしつけを見つめ直しました。自立していく過程では、支援者は「継続化した習慣化行動」に対してごほうびを与えることが効果的であり、もしもそれが続かなかったときには、500円から200円に下げるといったペナルティも報酬となります。自立とは「その人の能力に応じて、社会に働きかけ、それにより報酬を得て、その報酬の範囲内で、己の生活を営むこと」で、それは社会生活でとても大切なことながらです。ルールで行動することは、依存の抑制にもなります。



また、「居場所」とは、「空間」ではなく「役割」であることをおさえました。子どもには役割をもたせるための手伝い、祖父母には孫育てに関する役割をつくってあげることが、役割期待を認知し、役割メニューを拡大、役割遂行スキルを習得するうえで重要であると教示いただきました。

参加者は身近な例や笑いを織り交ぜた講義を通じて、保護者等への向き合い方を改めて捉え直し、文脈をみる観察眼をもつこと、上手に話を聞くスキルを自分の技術として身に付けることに高い意識を示すようになりました。

【参加者の声】（抜粋）

- ・文脈がコミュニケーションのポイントだと学ぶことができた。ほめるなどの行動で自分自身も成長し、地域の方々のサポート支援・援助を行っていきたい。
- ・終始大笑いで楽しく学ぶことができた。心じゃなくてスキルなのだというお話が響いた。メモの手が止められないほど素晴らしい内容ばかりだった。私が毎日実践していることが話に出て驚いた（笑）。
- ・これまで曖昧に感じていたが、今日のお話ではっきりした「役割」を意識できるようになった。